

表現教材としての YOSAKOI の可能性

中 島 孝 子

I 目 的

筆者は現在「表現」という教科で主として身体表現を担当しているが、この教科は、音楽にあわせてリズムカルに動いたり、自ら感じたことをいろいろな手段や方法で表現したり、他者の表現を感じとるという、いわば「感性」を育てる領域である。そのための教材は常に創意工夫と努力が欠かせない。なぜなら、時代と共に、子ども達の興味・関心は変化し、「感性」のアンテナは方向、感度共に変化するからである。常に柔軟に、全方位に心を開いておかねば、「感性」の基となる感動を「キャッチ」することも「伝える」こともできない。それゆえ、新しい教材開発とそれを実施するタイミングについては絶えず留意する必要があると考える。

さて、筆者は去る9月13日～15日までの3日間、新潟市の万代シテイを中心として、本町など4会場で開催された、第2回にいがた総おどりに審査員として参加する機会を得た。にいがた総踊りは、「YOSAKOI」(YOSAKOIの歴史と概念は次章で説明)によって、踊られているが、これまでテレビ放映で見たことはあったが、今回初めて、万代会場で目の当たりにし、その溢れるエネルギーと迫力に圧倒された。テレビ映像では踊り手の息使いや、迫力、観衆のどよめきなどの臨場感までは伝わらず、その場の感動は薄れてしまう。これこそは実際に会場に足を運んで、その場で踊り手たちの熱演や踊りぶりを見ない限りは、その魅力というものがわからないだろうと実感した。「こころ踊れば皆同じ」というスローガンのもと、91チーム、老若男女4000人もの踊り手たちの一心不乱に踊る姿は、沿道の観客を興奮の渦に巻き込み感動を与えていた。その踊りはまさに表現そのもので、踊ることによって自分自身を表現していた。大勢の人々をひきつける、YOSAKOIの魅力とは何であろうか？筆者が一番興味を感じた点である。

心を沸き立たせる教材、生き生きとした表現課題を常に模索してきた筆者の目にこのYOSAKOIは非常に新鮮に写り、その躍動感や人をひきつける踊りの魅力からして、YOSAKOIも又良い表現教材となり得るのではないかと考えた。その検討を行なうのが、この研究の目的である。

一方、YOSAKOIと言えは一般的知名度から言って、YOSAKOIソーランのイメージが

強いように思われる。小学校や中学校では既に教材用の YOSAKOI ソーランがあるくらい普及しており、幼稚園などでも、子供用の可愛い鳴子（音の出る拍子木）を手に夏祭りや運動会などで踊るところが多くなってきている。

また読売新聞（注1）によると、横越村では「キッズスポーツ教室」の運動メニューの一つに YOSAKOI ソーランを取り入れ、子供達が指導員と共に、かけ声をあわせて楽しそうに汗を流しているという。こういった記事を目にするたびに、幼児教育を志すものならば、簡単な YOSAKOI ソーランの基本の振り付けを一通り経験しておけば、将来、指導者として役に立つ場面もでてくるかも知れないと考える。

YOSAKOI を表現授業に扱った一例として、長津芳は、「オリジナル『よさこい』を作ろう」¹⁾という課題を、女子体育「サマーセミナー特集」の中で紹介しているが、ここでは、幼稚園、保育園、それに小学校の指導者などが対象で、最初からグルーピングし、一人一人が鳴子を持ってどんな動きができるか工夫しながら、順にリーダー役となって、動きを増やしていくという高度な方法をとっている。しかし一般の学生を対象とした場合、この方法では動きが何度もストップして、スムーズにはいかないと思われる。

そこで本研究では、「リズムに合わせて楽しく動こう」の単元が含まれている、筆者の担当する「表現」の授業の中で、試みに既成の YOSAKOI ソーランを一曲取り上げ、授業への学生の反応、感想などをもとに、年齢・性別を問わず惹きつける YOSAKOI の魅力を探るとともに、生き生きとした表現課題を求めて、新たな1つの表現教材としての YOSAKOI の可能性について考察することを目的とする。

II YOSAKOI の歴史と概念

ここでいう YOSAKOI とは、高知のよさこい、北海道の YOSAKOI ソーラン、加えて、「現代よさこい」と呼ばれる自由なスタイルのよさこいをも含めた、広い意味で「表現」としてとらえた場合のよさこい踊りとして捉えることとする。

もともと、よさこいとは「夜さ来い」と書いて、今宵たずねて来い、という意味を持ち、よく知られた「よさこい節」の一節によく出てくる言葉である。このよさこい節をもとにしてよさこい踊りが出来、高知の人々にとってよさこい祭りは、夏の風物詩としてなくてはならないものになった。このよさこい祭りは、次に北海道の「ソーラン節」と結びついて、札幌に新しく YOSAKOI ソーラン祭りが生まれることになる。この祭りは本家のよさこい祭りをしのぐ勢いで、瞬く間に全国に派生して、その土地の民謡等と結びつき、いわゆる YOSAKOI 方式と呼ばれる祭りが全国各地に誕生することになった。こうした中に、YOSAKOI ソーランとはまたひと味違った、「現代よさこい」と呼ばれる、極めて自由な YOSAKOI 系のおどりも生まれ、新しいよさこいの波をつくりながら現在に至っている。

次に簡単に、代表的な YOSAKOI おどりの祭りについて、その歴史と特徴などを調べ比較してみる。

1 よさこい祭り

よさこい祭りとは高知県で毎年8月に開催される、南国土佐らしい自由で情熱的な祭りで、第1回は昭和29年に開催され、平成15年で50周年を迎えた。そもそもは徳島県の阿波踊りに負けない市民の祭りをつくろうと高知商工会議所が音頭をとって始めた祭りで、

(1) 鳴子と呼ばれる音の出る道具を手にとって踊ること

(2) 「よさこい鳴子踊り」のフレーズを曲の中に必ず取り入れること

という2つの基本さえ守れば、衣装、踊りは自由という、現在に至る「よさこい祭り」の独特のスタイルを確立した。第1回は21チーム750人の参加者で始まったこの祭りも、50回を迎えた今年は130チーム、1万5千人の参加者を集めるまでになり、今や、よさこい系の祭りの原点として、全国的に招待されて各地の祭りやイベント、海外のフェスティバルなどでも演舞を披露するまでになり、日本を代表する祭りの一つとされている。

2 YOSAKOI ソーラン祭り

北海道で毎年6月にある開催されているよさこいの祭りで、YOSAKOI ソーランという名の示すとおり、高知のよさこい祭りに北海道の「ソーラン節」とがミックスされて生まれた新しいよさこいの祭りである。その歴史はまだ浅く、第1回は今から12年前の1992年(平成4年)6月に開催され、当初10チーム1000人の参加者、20万人の観客でスタートしたが、瞬く間に大衆の心をつかみ急成長し、2003年の第12回 YOSAKOI ソーラン祭りでは330チーム、44000人ももの参加者数に膨れ上がり、5日間で延べ202万人もの観客を動員し、今や本家の高知のよさこいをしのぐ勢いとなっている。そのスタイルは、

(1) 手には鳴子を持って踊ること

(2) 地元の「ソーラン節」のフレーズを曲の中に取り入れること

というもので、基本的にはよさこい祭りと同じである。

3 にいがた総おどり祭

昨年、平成14年9月に初めて新潟市で開催されたばかりの祭りで、第1回は、参加52チーム、約2500人の踊り手、観客動員数は2日間で延べ13万人と公表されている。そして2年目の今年は、規模も大きくなり、参加91チーム、4000人の踊り手、観客動員数は3日間で延べ18万人に増加した。参加チームと踊り手が昨年の倍近くになったことは、YOSAKOI が人々の中に浸透して、いろいろな機会に YOSAKOI を踊って楽しむ人々が増えたことを物語り、表現者の一人として率直に言って喜ばしい。

にいがた総おどり祭は、今、全国各地に派生している YOSAKOI 方式の祭りの一つである。ルールとして定められているのは

(1) 踊ることを基本とする。

(2) 曲、衣装、振り付け等に、新潟らしさや地域らしさを盛り込む。

という2点だけで、

- ・手に鳴子を持って踊るというルールはない。
- ・音楽は高知の「よさこい節」や北海道の「ソーラン節」のように、特に定まった制約はない。新潟甚句などを盛り込んで、新潟らしいオリジナル曲を作成するチームもあれば、既成の学校教材用ソーラン曲を使用するチームもある。
- ・衣装は「佐渡おけさ」に見られるような、笠を用いて新潟らしさをアピールするチームもあれば、斬新なデザインのチームもある。

などが特徴として見られるからである。

現在、従来のよさこいや YOSAKOI ソーランの踊りを継承して演舞しているチームもまだ相当数あるが、従来のよさこいのスタイルから離れて、独自のよさこい、いわゆる「現代よさこい」を志向しているチームもあり、混然としている。今後こういったチームが増え、加えて新潟の民謡などをベースに、新潟の伝統文化や民俗芸能などと色濃く結びついていけば、他所にはない新しい祭りのスタイル、にいがた方式とも呼べる独自のスタイルに発展していく可能性もある。

4 「現代よさこい」とは何か。

今から25年ほど前に、高知のよさこい祭りに参加したクラブチームが現在のいわゆる「現代よさこい」と呼ばれる YOSAKOI おどりの原動力となっているといわれている。

いわゆる「正調よさこい」は、格調高く、和装、法被、鳴子、ゆったりしたテンポの「よさこい節」が主流なのに対し、「現代よさこい」は、衣装、音楽、踊り、地方車に至るまで、気のあった仲間達で好きなようにデザインし、振り付けをしてチームまで立ち上げるというのが特色で、従来のよさこいと比べかなり自由奔放で、「自分達の好み」や「自分達の主張」があふれている。

このパワーあふれる自由奔放さが魅力となって、「現代よさこい」に夢中になる者も多いと思われる。

以上挙げてきた、すべての YOSAKOI おどりを全部ひっくるめて、ここでは YOSAKOI と呼ぶことにする。

Ⅲ 研究方法

本研究では、YOSAKOI のパワフルな踊りと、リズム表現にまず接してもらうために、筆者の担当する「表現」の授業の最初の課題～リズムに合わせて楽しく動こう～の中で YOSAKOI ソーランを取り上げ、授業への学生の反応を注意深く観察するとともに、授業終了後、感想などを記入してもらうアンケートを実施し、それらの結果を基にして分析し、考察を加えた。

1) アンケート調査

表現の授業（全15時間）の第1時間目を使って、YOSAKOI ソーラン授業単元終了後、自由記述を中心としたアンケート調査を実施した。実施期日、調査対象、調査回収率、アンケート内容は以下の通りである。

- ・調査期日 平成15年10月2日
- ・調査対象 表現授業受講者126名（男子32名、女子94名）
- ・調査回収率 100パーセント
- ・アンケート内容

1、YOSAKOI の経験の有無

- a、全く初めて
- b、数回経験
- c、継続している

2、YOSAKOI の魅力とは何か？また実際に授業で踊ってみての感想。

（自由記述形式）

2) 写真の動きから見た考察

本研究では、観察者自身が身体表現の経験者として、また身体表現の指導者として、主観的な立場から、客観的身体感覚を解釈し考察を加える、解釈学的手法を取り入れた。

3) 1)、2) の結果と考察に基づき、保育の指導者を養成する指導者の視点で、「表現」教材への導入に関する考察を行なった。

使用した曲は、運動会や体育祭などでよく使われ、一般的に知名度が高いと思われる「ヨッチョレ」という代表的な YOSAKOI ソーランの曲である。授業では鳴子は持たず、とりあえず既成の曲で、一般的に普及している踊りで実施した。

IV 結果と考察

最初の予想では、YOSAKOI ソーランが全く初めてという学生は、その独特の踊りにより抵抗感を示し、戸惑うのではないかと考えていたが、結果は予想に反して、皆、目の色を変えて必死で踊り始めたのである。しかもダンスなどでは恥ずかしがる男子学生が積極的に踊り、中にはまとめ役や、教え役を買って出る者まで現れたのには驚いた。後でわかったことだが、地域の YOSAKOI ソーランチームで既に3年も踊っているのだそう、なるほど様になっていた。一人が前に出てきてステージの上で踊ると、次から次と上がってきて、押しあい、へし合い、その熱気とパワーに圧倒されるほどであった。

「みんなと踊るのが楽しかった」、「一体感を味わった」、「感動した」、など、全員が好意的な感想で、YOSAKOI ソーランの魅力を再認識した次第である。

1、アンケート調査の結果と考察

よさこいを踊った経験の有無を尋ねたところ、図1のように、

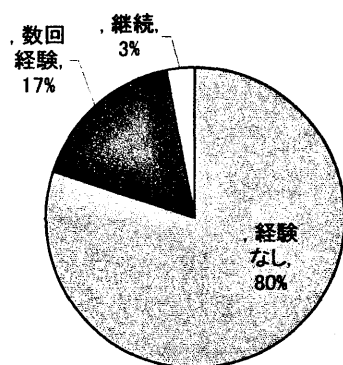


図1 よさこい経験の有無

A：まったく初めてで、経験なしという学生が約80% (100人)、

B：高校の体育祭や地域のボランティア活動などで、数回経験ありという学生が 約17% (22人)、

C：継続的に今現在も地域のよさこいチームで踊っていると言う学生が約3% (4人) と言う結果であった。

全体的に見ればよさこい経験者は2割程度で、経験者のうち何人かは、高校の体育祭で踊った程度であり、ほとんどがよさこい初心者である。

次に、ほとんどがよさこい初心者の集団に、初めて経験したよさこいの魅力について、自由記述形式で感想を書かせたところ、

- ・よさこいの魅力はなんといってもその迫力だと思う。観てると、つい一緒に踊りたくなってくる。
- ・誰でも気軽に一緒になって楽しく踊れる。そして自然と笑顔になれる。
- ・みんなで大きな声を出して踊ったあと、すっきりした気持ちを味わうことが出来る。ストレス解消になる。

- ・元気が出る。よさこいとソーランの両方のいいところを取り入れているため、Power も 2 倍、魅力も 2 倍だと思う。
 - ・大勢が一つになって踊ることで得られる一体感、連帯感、達成感、そして何より満足感がある。
 - ・子供から大人まで、年齢や性別を問わず楽しめる。
 - ・皆で同じ踊りを、「合わせて踊る」ことの気持ち良さを味わえる。
 - ・思いっきり体を動かすことの爽快さを感じられる。
 - ・「和」のよさこいを現代風にした曲に合わせて自分なりに今風に表現することの新鮮さを味わえる。
 - ・見ている人に元気や活気を与えてくれる。
 - ・動きがダイナミックで、かつ繊細である。
- などの感想が寄せられた。

感想を分類していくと、大まかに、次のようなキーワード（出現頻度回数）が浮かび上がってくる。

一体感（39）、ダイナミック（31）、爽快感（23）、迫力（21）、団結（18）、達成感（13）、元気（12）、満足感（11）、パワフル（11）、連帯感（10）、カッコいい（9）、豪快（4）新鮮（4）、力強い（3）、活気（3）、躍動的（3）

以上の結果をもとにして、YOSAKOI ソーラン、及び YOSAKOI 全体についての魅力とその可能性について考察する。

アンケートの感想に出てきた、上記のキーワードを分析してみると、全てプラスの発想で、非常に積極的、前向き、かつ明るく健全なイメージのキーワードがほとんどを占めていた。

また、今回初めて授業で YOSAKOI ソーランを経験した学生は、次にあげる点を列挙して、よさこいの魅力を指摘した。

- （1）みんなで一つになれるところ
- （2）全身を使えるところ
- （3）かけ声があるところ
- （4）迫力があるところ
- （5）思わず踊りたくなる場所

これは非常に貴重なことを示唆している。

常日頃、筆者は、身体表現としてのダンスは踊ることの楽しさを味わうことが何よりも

大切だと考えていたが、以下にあげる、踊る楽しさを演出する要素、ポイントは、上記のYOSAKOIソーランの魅力そのものと類似している点が多い。すなわち、

- (1) 一人よりも、大勢で踊ったほうが楽しい。
- (2) 小さな細かい動きよりは、体全体を使って大きな動きで。
- (3) 時には、かけ声や歌、手拍子などつけて。
- (4) メリハリをつけてダイナミックに。
- (5) 相手を(観客を)意識して。踊る自分も意識して。

などである。

身体表現は単なる運動ではない。表現である。表現するということは身体を媒介として心を伝えることでもある。

つまり、YOSAKOIは身体表現のダンスとしても多くの人々をひきつける理想的な条件をほとんどすべて満たしているといえる。初めての者でも、一気によさこいに心惹かれるのは、こういった要素を満たしているからだと思う。

また、感想の中に、

- ・太鼓の音が心に響いてドキドキした
- ・日本の心、日本の和を感じる
- ・新しい自分が発見できた

という記述が見られたが、昔から日本の祭に馴染みの深い太鼓の響が、我々がYOSAKOIに心惹かれる重要なポイントの一つと考えられはしまいか。つまり、この太鼓の響が、

- (1) 現代社会では失われつつ、また廃れつつある日本古来の祭りを想起させ、こころ躍らせるのではないか……。
- (2) 大昔、大地に根ざした農耕民族だった日本民族の懐かしい郷愁にも似たような想いを、自然と心に湧き起こさせるのではないか……。
- (3) 人工的にプログラミングされたテクノミュージックに代表されるような機械音があふれるせわしない現代の日常生活の中で、非日常的でかえって新鮮に写ったのではないか……。

と、筆者は考える。いずれにしても、不思議な魅力を筆者も生徒もYOSAKOIに感じたことは確かなようである。

日本の民俗芸能の研究者として知られる三隅治雄は、著書「踊りの宇宙」²⁾の中で、「学校では、西洋音楽一辺倒の教育を受けても、われわれ日本人には、何かしら独自の音楽体質みたいなものが培養されていて、……(中略)……内に秘めた音楽体質が蘇ってくる」と述べ、更に、「日本人本来の芸能体質は保たれ……(中略)……次代に持ち越されるで

あろうことは十分に予想できる」と述べているが、和の楽器の代表である太鼓の響きに心躍らせる体質を、われわれ日本人は、体の奥底に持っているのかもしれない。それを指して、学生は「日本の心、日本の和を感じる」と書いたのであろうと推察される。

2 実際の動きからみた結果と考察

YOSAKOI ソーランは実際に踊ってみると、足腰を踏ん張った大きな動作が多く(写真1、2参照)かなりの運動量がある。音楽に合わせて一曲踊るだけでも、息があがり、汗がほとばしり出る程である。踊り終わった後の学生達の荒い息使いや、上気した顔を見ると、改めてその運動量の多さに驚く。

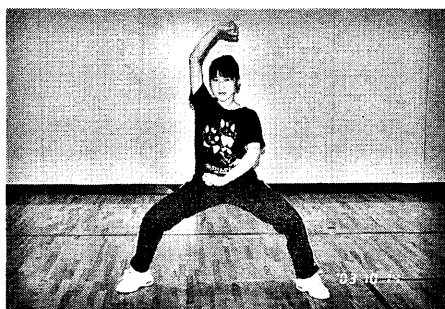


写真1



写真2

「声に出して読みたい日本語」の著書で有名な齊藤孝は、その著書「身体感覚を取り戻す一腰・ハラ文化の再生」3)の中で、失われつつある日本独自の「腰肚(ハラ)文化」の復興・再生を提唱しているが、YOSAKOI ソーランの動きには、大地をしっかりと踏みしめ、腰を据え、腹(ハラ)を据えた、日本の伝統芸能独特の動きが多く含まれ、知らず知らずのうちに、足腰を強くし、腰を据え、腹を据えるトレーニングをしている。つまり、自然で正常な身体感覚を取り戻すためにも、からだづくり、健康づくりの面から言っても、YOSAKOI ソーランには大きな効用があると言えるだろう。

よさこいに精通している人によれば、YOSAKOI ソーランの動きの一つ一つには意味が込められているという。例えば

- (1) 波を表現している様な動き(写真3、4参照)や、
 - (2) 網を引いたり、すくい上げる様子を表現した動き(写真5、6参照)
 - (3) 舟を漕いでる様子を表現した動き(写真7、8参照)
- などが代表的で、他に、
- (4) 鳥が飛んでるような動き(写真9)や、
 - (5) 三味線を弾いているような動き(写真10)などもある。



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真10

作品として出来上がった一連の振りはあっても、授業で行なう場合は、これらを一応踏まえた上で、指導者は動きを自由に組み合わせたり、また変化させて自分達で新たに新しい動きを加えたりすることも出来る。音楽も既成の YOSAKOI ソーランの曲を使用するのも良いし、またノリの良い曲を選んで、「現代よさこい」風の動きを入れてアレンジしても良いだろう。

肝心なことは、振り付けの動作は単純でパターン化してもいいから、曲のリズムにしっかりと合うように構成することである。あとは思いっきり開放して目一杯踊れば良い。YOSAKOI ソーランの場合、単純な繰り返しのほうが、かえって生徒も安心して、おどりの動きの持つ意味に集中して踊れるのではないかと感じた。

実際、「表現」とは別の「ダンス」の授業で、ジャズダンスの中にこれらの動き(写真11, 12, 13, 14, 15, 16参照)を取り入れて踊ってみたが、かえって新鮮なフレーズが出来て好評であった。「YOSAKOI ソーラン」とは一味違った、いわゆる「現代よさこい」と呼ばれるおどりでは、こういった、若者の心を惹きつけるスピード感あふれる激しい動きが持ち味で、実際激しい動きが多く含まれている。観ていると、さながら「ジャズ風 YOSAKOI」とでも呼べそうな雰囲気であるが、若い世代に受け継がれ、進化してきた YOSAKOI ととらえれば、これもまた時代の要請なのかもしれない。そしてまた、こうい



写真11



写真12



写真13



写真14

ったものまで排除せず、YOSAKOIとして1つの枠にくくれるという度量の広さがYOSAKOIの素晴らしいところでもあり、魅力の一つなのだと思う。



写真15



写真16

3 「表現」への応用に関する考察

保育の実際の場面でYOSAKOIを応用するには、次にあげる2つの点に留意したい。

(1) 鳴子は是非用意したい。

音の出る楽器として鳴子は幼児には貴重な存在となり得ると思う。あの独特な音がする鳴子を手に持って、ただ音楽に合わせてカチャカチャと音を鳴らすだけでも満足し、その音につられて動きも触発されるのではないかと思うからである。その点、音の出る鳴子は幼児にとってはたまらない魅力だと思うからである。用意するに当たっては、音が容易に出るように、出来るだけ幼児の手のサイズに合った、握りやすく振りやすい幼児向けの小さい鳴子が望ましい。市販のものだけでなく、工夫次第では、代わりに音の出る手作り楽器で代用しても面白いかも知れない。

(2) 発達段階に応じた指導を。

他のリズム表現と同様に対象年齢によってそれぞれの発達段階を考慮に入れて次のように指導するのが望ましいだろう。

3歳児……3歳児は自分を取りまくすべてにリズムを感じ、ごく自然にそれを自分の動作でそれを表現しようとするが、発育発達がまだ未熟で、かつ個人差が大きいという特徴がみられるので、全員であわせて踊ることに主眼をおかず、場合によっては鳴子を手に持って振り鳴らしながら、自分達の好きなように音楽のリズムに合わせて体をゆするだけでも良いだろう。

4 歳児……4 歳児は自我の成長と共に、少しずつ自分の創意工夫や想像が加えられて個性が伸長する時期であるが、次第に仲間意識が芽生え、友達と一緒にグループで何かをしたいという意識も強くなるので、みんなで一緒にかけ声の部分を合わせたり、ポーズを決めたりして、ある一部分だけは全員で簡単な動きを揃えて踊るという場面を設定すると良いだろう。

5 歳児……5 歳児は精神面の成長と共に、身体的な運動能力も次第に発達して、リズムカルな表現にも巧緻性を増してくる時期であるので、さほど難しい動きでないならば、ほぼ指導者と同じに踊れるようになると思われる。従って、子供達が興味を持つて踊れる簡単な振り付け、加えてリズムがとり易く、踊りやすい振り付けにアレンジして踊ると良いだろう。

また、指導に当たって、どの年齢の子にも共通して留意することは、細かい動きを注意するよりも、できるだけ大きな動作で、楽しんで踊ることを第一に指導することである。そして何より大切なことは、指導者が YOSAKOI を楽しんで踊ることである。なぜなら、指導者が心から楽しんで踊れば、必ずやその思いは伝播して、子供たちにも伝わるからである。言葉だけでなく踊りを媒介として「楽しむ心」を伝えるのである。「思いを伝えあう」、「心を通わせあう」……これこそが表現の真髄ではないだろうか。

V 結 論

今まで述べてきたように、YOSAKOI には、その独特の持ち味と許容範囲の広さ、自由な気風があり、多くの魅力を備えている。

筆者が何より一番素晴らしいと思う点は、YOSAKOI が踊る人の心と、観る人の心をしっかりつかんでいるということである。新潟においてはわずか2年目で、91チーム、4000人の踊り手、18万人の観客が祭りに参加したと言う事実がそのことを物語っている。また、「表現」の授業で、初めて YOSAKOI を踊ったという100名もの学生までが、わずか90分の間に YOSAKOI に夢中になったという事実がそれを証明している。

そういったことから考えると、多くの人の心を動かす YOSAKOI は身体表現の素材としても優れているのではないだろうか。

表現とは心を表に表すことである。心を表に表すためには、心を開放せねばならない。心を開放するための条件、心を動かすための条件を YOSAKOI は見事に備えているからである。

以上のことから大勢の心を惹きつける YOSAKOI は、心を通わせあう「表現」にとって優れた教材の一つであり、全員一斉の踊りから、グループごとに個性を発揮して発表しあ

うなどの工夫次第で、今後更に授業への有効活用が期待できると筆者は考える。

【参考・引用文献】

- 1) 長津 芳、2003、「ゆたかなかわりを育てる表現～ひとりが輝く、みんなが輝く～」女子体育 第45巻 第7・8号
- 2) 三隅治雄、2002、「踊りの宇宙」吉川弘文館
- 3) 斉藤孝、2000、「身体感覚を取り戻すー腰・ハラ文化の再生」NHKブックス
- 4) 坪井善明・長谷川岳、2002、「YOSAKOI ソーラン祭り」岩波書店
- 5) 三隅治雄、1990、「日本の民謡と舞踊」大阪書店

注1：2003（平成15年） 10月22日（水曜日） 読売新聞（地域欄）